

## [報告]

## 同志社大学大学院 総合政策科学研究科 ソーシャル・イノベーションコース 10周年記念フォーラム

～学び究める！社会を変える知恵と技～（2017年11月23日）

登壇者：風間規男，山本陽一，本多幸子，今里 滋，新川達郎，上村恒夫，長澤源一（登壇順）

### はじめに

「ソーシャル・イノベーションコース 10周年記念フォーラム」は、同志社大学大学院総合政策科学研究科に2006年より開設された「ソーシャル・イノベーション研究コース」が以来10年を経たことを記念して催行された。本コースは、2005年度の文部科学省の「魅力ある大学院プログラム」（いわゆる大学院GP）に採択され、2006年に前期課程、2008年には後期課程を開設することとなった。そして研究科のコース再編によって、2012年度から前期課程はソーシャル・イノベーションコースとなった。

本フォーラムは、2017年11月23日（木・祝）の13時30分から、同志社大学烏丸キャンパス志高館1階112教室で開催され、当日は120名の参加があった。プログラムは3部構成であり、「第1部 同志社ソーシャル・イノベーション（SI）コースのこれまで」においては、「ソーシャル・イノベーションコースの10年の歩み」と題するスペシャルムービーの後、記念対談「SIコースを設立した思い & 10年を振り返って」を行った。「第2部 ソーシャル・イノベーションコースのいま」においては、コースで学ぶソーシャルドクター達が語る研究と実践、特に社会人大学院の日常が語られた。「第3部 ソーシャル・イノベーター教育の未来」においては、教員や修了生多数の参加のもとにダイアログ「ソーシャル・イノベーター教育のこれから」が語られた。

今回の報告においては、上記プログラムの第1部を紹介することとし、第2部および第3部については機会を改めて報告したい。

### 1. ごあいさつ

**司会：**本フォーラムの開会に当たりまして、同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科を代表しまして風間規男先生からご挨拶をいただきます。

**風間：**ただいま、ご紹介にあずかりました同志社大学政策学部の教務主任を務めております風間と申します。よろしく願いいたします。

学部を代表いたしまして、一言ごあいさつをさせていただきます。10周年だと思って伺ったら12年目ですか。おめでとうございます。私も発足当時から関わっていたんですが、本当に月日の経つのは早いと思っています。

このように社会的にも、あるいは教育の上でもソーシャル・イノベーションコースが発展、定着してきたのもひとえに、前に座っておられると威圧感を感じますが、新川先生と今里先生のお二人と、それからこのお二人のネットワークを通じて集められた教員の皆様とたぶんこの2人をはじめとする教員の方々に慕われてこちらのコースで学ばれた皆さんのおかげだと思っています。本当にこのような形で10周年を迎えられたことを学部・研究科の教員として誇りに思っております。

その一方で、教員としては若干じくじたる思いがあります。かなり以前に政策学部と総合政策科学研究科が一緒になったのですが、ほかの教員が無関心で、このお二人に甘えてコースの運営を任せっぱなしにしてきました。この場をお借りしてお詫びしたいと思います。申し訳ありませんでした。

SI コースはまぎれもなく、このお二人によって支えられているものであります。この状況を当然のことだと皆さんは思われているかもしれませんが、実はアカデミックな意味での研究能力と地域活動などの現場経験、それから社会人などがこのお二人に惹かれてここで学ぼうという人間の魅力、この3つを兼ね備えている人は、私の周りを見回してみても分かるのですがいないのです。このお二人が、たまたま総合政策科学研究科にいらっしやったということは、私からすると奇跡に近いのではないかと、というぐらいの素敵な偶然が重なったんだなと思っております。

この2人には命が続く限り、SI コースにかかわっていただきながら、学部・研究科としては、組織的にこのコースを支えていきたいと思っています。現在、お二人からいろいろお話を伺いながら、今後はどうしていったらいいんだろうと議論しているところでもあります。

ただ、なかなかいいアイデアが出てきません。どうしてなのかというと、はっきり言って私も含めて多くの教員には、現場体験というか、地域活動の体験がほとんどないからなのです。そこで、こういうものなのだろうという「妄想の世界」で、カリキュラムやこれからのあり方を考えているところがあります。これではなかなかいいアイデアが浮かんでこないなと思います。「これから、どうしていくのか」ということについて、このコースを支えられてきた先生方、それから卒業生、現役生の方々からいろいろお話を拝借しないとイケない場面が、多々あるのではないかなと思います。

私としましては、今日はこのシンポジウムを拝見させていただいて、このソーシャル・イノベーションコースがこれまで成してきたこと、それから、その課題と将来の展望について学んでおきたいと思っております。皆様にご覧いただいても、楽しく、意義ある時間をお過ごしいただければと思います。

以上簡単ではありますが、あいさつに代えさせていただきますと思います。ありがとうございました。

(拍手)

司会：風間先生、ありがとうございました。続きまして、総合政策科学研究科総政会会長の山

本陽一よりごあいさつを申し上げます。よろしくお願いいたします。

山本：皆さん、はじめまして、こんにちは。総政会会長の山本陽一と申します。総政会について簡単に説明をさせていただきます。このソーシャル・イノベーションコースが属している総合政策科学研究科の同窓会組織でございます。現在約1,200名の会員の組織で構成されています。10周年おめでとうございます、と言いたいところですが、私自身、このソーシャル・イノベーションコースのM1、マスターコースの1回生です。もともと、私は2003年に総合政策科学研究科の企業政策コースが当時ございまして、それに入学して2005年に修了したんです。このソーシャル・イノベーションコースができたのが2006年。2005年にいったん修了して、そこから、総合政策の総政会の活動をしていたのです。

そのときに、ソーシャル・イノベーションコースがすごく光り輝いているように見えたんです。初めは何をしているか分からなかったんですね。江湖館という建物があって、そこで、院生の一人が撃ったシカとかイノシシを食べていたんです。だから、僕は、最初はSIが何か分からなかったから、シカとイノシシの省略かなと思っていたんです。そして、みんな楽しそうだなと。それに最近は別の方ですが野菜も持ってきてくれる。何かおいしそうなのを食べてええな、うらやましいなと。その辺のことは、後ろの方に野菜とかの展示がございますので、それを皆さんぜひ、ご覧になっていただくとお分かりいただけると思います。

そういううらやましい気持ちから、もう1回僕はそこに入って勉強してみよう、ということで、また勉強をさせてもらっているところです。今、もし、ソーシャル・イノベーションコースに入学しようかな、とお考えの方がおられましたら、ぜひ、今日のこのイベントに出て、それを決断してください。簡単ですが、以上でございます。

(拍手)

司会：山本さん、ありがとうございました。

## 2. 記念対談「同志社 SI コースの 10 年を振り返って」

司会：では、続きまして、「同志社ソーシャル・イノベーションコースの 10 年を振り返って」と題しまして記念対談をさせていただきます。ソーシャル・イノベーションコースの設立者でソーシャル・イノベーションの父といわれております今里滋教授、新川達郎教授との対談が行われます。インタビュアーは総合政策科学研究科の卒業生でもあり、ソーシャル・イノベーションコース設立にも深く貢献いただき、現在本学の嘱託講師としてご活躍されている本多幸子先生によるしくお願いいたします。

本多：よろしくお願いいたします。お二人の大先生方と私はちょうど同じ年です。今年全員 67 歳です。それで、お二人の先生方がソーシャル・イノベーションを作られたのですが、お二人の学問的専門性とソーシャル・イノベーションとの関連性をお話してください。

今里：私と新川先生、それと先ほどの風間先生、いずれも主たる専門は行政学で、大学院生時代から日本行政学会に所属していました。

私は大学院博士後期課程の研究テーマは「行政学の学問的一体性 (Disciplinary Identity) とは何か?」というものでした。当時、行政学の本場はアメリカとされていたので、アメリカ行政学の歴史研究を通じて、行政学の学問的一体性の問題を解明しようとしていました。その結論は行政学とは改革の実践のための学問である。いわば、ソーシャル・イノベーションの学問であるというのが結論なのです。私の博士論文は、当時の 200 字の原稿用紙で 2,500 ページ書きました。ワープロなんてもちろんありませんので、すべて手書きでした。指導教官の先生に怒られました。「こんな重たい論文を持ってくるな。読みたくない」と言われました。

アメリカの行政学ができたのは、ちょうど 1900 年代の初めから 30 年代にかけてです。その時代のアメリカは都市政府の腐敗や非効率性が蔓延するなど、非常に大きな社会的・政治的・行政的な問題を抱えていたのです。そのアメリカの現状を改革するために立ち上がった人たちがいたのです。その人たちが活躍した時代を

プログレッシビズム (Progressivism) とか改革の時代 (Age of Reform) と言いました。

その改革のうち、行政改革を進めるために作った理論的な武器が行政学です。行政学説史的には正統派行政理論 (The Orthodoxy) と言います。つまり、行政の世界は政治の世界とは次元の違う技術の世界であって、政治につきものの価値やイデオロギーが混入する余地がないという行政観を前提にしています。ホッネは、建国以来アメリカ人が嫌ってきた官僚制的行政——選挙で選ばれていない職業行政官が政治を操作して国民の自由や権利を抑圧するような体制——をアメリカにも持ち込もうとしているのではないかという嫌疑を避けるための政治行政二分論というロジックでした。このロジックを全面に押し出して公務員制度改革を含む改革を進めたわけです。つまり、改革というミッションと目的が先にあって、そして行政学がそれを理論的に後付けしていったという歴史があったというのが私の見解です。

それから、1950 年代に入ってからですが、社会科学、とくに政治学にも行動論革命という動きが出てきます。客観的にその妥当性を検証できない価値や規範——何が正しくて、何が正しくないか——を扱う学問は、厳密な意味で科学ではない。そのような科学としての実体を持たない社会科学に果たして存在意義があるのかとの批判を受けて、では社会科学が自然科学のような科学になるための条件とは何かが問われ、政治学の自己変革として出てきたのが行動論的政治学だったわけです。具体的には、政治現象の因果関係を解明するために大量のデータを収集し、統計学を駆使して分析していくといった手法が全盛になりました。

ところが、1960 年代に入ると、アメリカ社会は、ベトナム戦争であるとか公民権運動といった政治問題が噴出して、大きく激しい論争に巻き込まれることとなります。このような問題は、当然に国家の存在意義や人間の真の平等とは何かといった価値的・規範的な争点を含んでいるわけです。ところが、人間の行動を数値化して、その計量的な分析を行うことに傾斜している行動論的な政治学をはじめ社会科学は、こうした価値的・規範的な問題にはそもそも対処できませんでした。そこで、もう一度、いわば逆の方向から社会科学の存在意義を問う批判

が出てきます。そのような批判を受けて、もっと社会の現実の問題に立ち向かう、新しい政治学、行政学を打ち立てようという流れが出てきます。これを脱行動論革命と言います。行政学の世界では1970年代後半に「新しい行政学」(New Public Administration)という流れが出てきます。私は1979年から80年にかけてアメリカのシラキュース大学マックスウェル行政大学院に留学に行きまして、その大学院の教授で、そのような新しい行政学の指導者であったワルドー(Dwight Waldo)先生のもとで学ぶ機会を得ました。

それで、ますます学問というのは、とくに社会科学は、その全部とは言いませんが、少なくとも一部は、社会が直面している問題や課題に正面から取り組んで、そして実現すべき理念や価値を掲げ、それを実現する戦略や政策を提示すべき義務を有しているのではないのか？それこそが学問の社会的存在意義ではないのか？ワルドー先生の警咳に接し、アメリカにおいて、社会的正義(social justice)とか社会的公平(social equity)を掲げて、それを実現していく政治学や行政学を発展させていこうという潮流に共鳴したわけです。

その後、九州大学法学部で教鞭を執るようになり、行政学や地方自治の研究者としての道を歩むようになるわけですが、政治家とか官僚とかという人たちは、本来は国民や住民の奉仕者であり代弁者であるべきなのにもかかわらず、彼等が主役や受益者のように振る舞っていて、国民や住民は従順な受益者や傍観者になってしまっているが、それはおかしいのではないか、やはり、あくまでも市民が主体に社会を変えていくような市民社会を構築していかなければいけない、という思いがあって、九州大学のある福岡市で、まちづくりNPOをつくっているんな市民公益事業をやったり、ついには貴重な自然環境を守るために福岡県知事選挙に出馬したりと、そういう背景がありました。

そこで、さっき触れた「魅力ある大学院教育イニシアチブ」という、2年間で1億円を助成してくれる文部科学省の公募事業の存在を知り、こんないい話はない、宝くじも買わないと当たらないからとにかく申し込んでみよう、当時総合政策科学研究科長だった新川先生に話を持って行くと記憶しています。申請する「魅

力ある大学院教育」は「ソーシャル・イノベーション、どうでしょうか」と言って、ソーシャル・イノベーションの教育と研究にしようということで、お互いにすぐに意思一致ができました。早速「ソーシャル・イノベーション研究コース」という新たな大学院プログラムを創設するという計画調書を作成し学術振興会に提出し、当時の八田英二学長とともに上京して審査会のヒアリングを受けました。その後、11月下旬でしたか、当時の上村事務長が、「先生、当たりました！」と声を弾ませて事業採択を知らせてくれたときは本当にうれしかったですね。

**新川：**私も今里先生と同じように行政学という分野の研究者としてスタートをしました。ただ、特に研究のフォーカスを当てていたのは、地方自治とか地方制度の研究を主にやっていました。どちらかと言えば、京都府とか京都市とかこういう地方自治体の仕組みとか、その運営の効率化とか、そんなところに当初は関心があって、研究をしていました。

こういう地方自治研究をやっていると、特に私の先生がそうだったのですが、「現場、地域にきちんと入って、そして、そこで学ばないとい研究にはならないんですよ」とずっと言われていました。もうお亡くなりになりましたが、ずいぶんといろんな現場に連れていっていただいて、そして、自治体の方々と一緒に学ぶ機会をたくさんいただいたのが、たぶん、今の私自身の勉強のおおもとになっていると思います。もちろん、理論的な背景としては、もう少し一般的な抽象的な論点を教えてくださった先生もいらっしゃるんですが、今につながっているのは、そういう実践的なところかな、というふうに改めて思っております。

こうしたそれぞれの地方自治体の研究を進めて行く中で、教員としては宮城県の仙台市にある東北学院大学その後は東北大学での研究の中で、現場に関わるということがさらに増えていきました。たぶん、九大もそうだったと思いますが、東北大でも東北地方にあってその地域社会との密接な関わりを持たざるを得なかったですし、そうした教育研究にかなりのウエイトをかけなければいけないこともあって、たくさんの地域の皆さん方と一緒に勉強する機会、研究をさせていただく機会がありました。

その中で、地方自治とか地域の未来を考えていくときに、どうしても従来の行政目線、あるいは政府目線ではなくて、市民の見方、市民からの考え方ということにもっと軸足を置かないと本当にいい行政、あるいはよい自治、そして統治機構のよりよい仕組みというのができないんだらうなということを実感するようになりました。そして、それもあって80年代の後半ぐらいから少し勉強を始めたのが、そういう市民の力というのを具体的にどんなふうに発揮することができるんだらうかということでした。そして、それを公共的な部門、政府部門の中にどんなふうに生かしていくことができるのだらうかということでした。市民参加を現実の問題として私自身がかわっていく、こんなことを考え、やり始めました。

80年代の終わりぐらいに日本でも少しはやったんですが、アメリカ合衆国で進め始めていたNPO研究やそれを公共的な部門と連携をして活躍をさせていくような仕組みがいろいろと議論されていたことがありました。市民の力で、従来は行政サービスと考えられてきたものや手がつけられていなかった問題を、ボランティアに民間で解決してしまおうというのです。スラムの再開発を市民が公益目的で実践するコミュニティ・ベースド・デベロップメント・コーポレーション(CBDC)とか言われるのが、走りだったような気がします。そんなのを勉強していたときに、これは日本でもやらねばというふうについ思ってしまうと、動き始めたら、実はそんなことを考えている人が日本中にたくさんいらっしゃいました。全国各地でそういう声を上げ始めると、本当に今、NPOとかNGOで活躍しておられる方々があちらこちらで、そんなことを考えてやっておられた。今里先生もそんな一人でした。

本当に思い返してみると、私たちの年代でそんな連中が全国あちこちにたくさんいるな、と改めて思っています。それこそ、この近くでいいますと、大阪大学にいらっしゃいます山内直人さんとか、その先生の本間正明さんもそうでした。あるいは名古屋の後房雄さんもそうですし、東京にも、全国各地にそんな人たちがいました。そんな中で、こういう市民の力というのをどう社会の中できちんと発揮していくか。そして、公共的な問題をどんなふうに解決してい

くのか、ということも地方制度の研究と合わせて一緒にするようになりました。そして、その中で市民参加とか市民協働とか、こんなことを一生懸命やり始めたというのが90年代だったかと思います。

そして、この同志社に来て、改めて出会ったのが今里さんでした。もともとと行政研究などではご一緒することも時々あって、九大に呼んでいただいたり、東北大に来ていただいたりということもあったのですが、同志社で本当にラッキーなことにご一緒できて、しかもそれぞれ九州と東北でこうした市民活動に携わって自らそうした組織をつくり、運動に直接かかわりという体験を持っていたことが、たぶん、このソーシャル・イノベーションというところに上手につながったのかなと改めて思っています。

**本多:**ありがとうございます。私も先ほど10年前のムービーから見せていただいて、いろいろ感無量なんです。当時今里先生が1億円を当てられたお金で、今は大原で農縁館とはなっています。農家を探そう、町屋を探そう、ということで、私は当時乗っていた紺色のクラウンを運転して、今里先生、新川先生、今日来ておられる上村元事務長を乗せて、大原をずっと捜し回ったんです。そして、後に大原工房のオーナーの方が、「あの連中、なんちゅう、集団やろう」と思って見ていたと。私がやくざの姉御。「みんなやくざかな。あの風貌は」と思われたらしいのです。いったいどういう人たちが大原をうろうろしているんだ、というようなことを後に言われました。そういうふうな、スタートがありました。

両先生方がソーシャル・イノベーションを10年前にお作りになった思い、そして、現在のSIの状況とか、ソーシャル・イノベーションという世の中のこんな風潮になっているんですけど、その辺は今、どのようにお感じになっているのでしょうか？ お聞かせください。

**新川:**それでは、僕の方から。ソーシャル・イノベーションコースを始めたときのことをお話しします。もちろん、今里先生から最初にアイデアをお伺いしたときに、「ああ、これはいける」と思って始めました。ただ、その持っている方というのがなかなか難しいなというところ

があって、どういうふうこれを具体的に展開できるのかとか、心許ないところもあったのです。ただ、その中で、大きくひとくくりにしていえば一人ひとりそれぞれの私たちの暮らしの中で持っているいろんな問題、言ってみれば、生きづらさというようなもの、そうしたものを丁寧に解決していけるような、そんな活動ができるといいですし、それを教育と研究の中にもっときちんと取り込まないといけないのではないか。これは思いとして共通していたかと思えます。

そして、実は、よく考えてみるとそういう問題というのは社会のいろんな場面に、それこそ分野を問わずたくさんあって、そのことが、これからの教育の中で特に大学院の教育の中にむしろ大切なのではないかと、思い始めました。ですから、その当時、実は同志社大学大学院総合政策科学研究科には、公共政策コースと企業政策コースという、言ってみれば、公共部門の政策を考える、それから、企業の政策を考える、2つの政策があったのですが、もう一つ欠けていますよねということを変えて感じました。市民のあり方とか社会公益のあり方というのを市民の立場で考えるような、民間非営利、あるいは市民社会セクターというふうに言われるようなところ、そういうところをもっともっときちんと働いていく必要があるということでした。そして、それが政府部門もそして、民間企業部門も変えていく。そのあり方を変えていくような、そういう市民活動のあり方というのをぜひつくっていききたいね、と考えていました。

そして、それも実現できなければ話になりませんから具体的にこれらの市民活動を担う、そうした高度専門職業人、これを私たちはまずはつくっていく必要がありますね、ということで、このSIのコースを始めました。もちろん、そのときに大事だなと思ったのは、こうした社会にイノベーションを起こしていこう、あるいは、ご自分自身でそう思っておられなくても、実はやっていること自体がソーシャル・イノベーションだというような人が山ほどいることでしたし、それに改めて気づきました。そういう人たちの活動を、本当はご自分自身でこれがソーシャル・イノベーションだということに気づいていただく。そして、その気づきをたくさんの人にも共有していただく。つまり実践をしつつ

研究をして、実践も研究も完成させていく、そしてその成果をほかの人に教え伝えて社会に広げていく、そんな仕組みが必要だよねということで、改めてこのソーシャル・イノベーションというのは、大いに可能性があるな、と思った次第でした。

そして、この12年間、ソーシャル・イノベーションを実践し研究成果としても残してくださる方々というのがたくさん出てきて、本当に大きな成果を上げてきたなと思っています。もちろん、まだまだ心配なことはたくさんあります。それぞれのイノベーションというのが本当に社会的に価値がきちんと評価をされて、そしてそれが広がっていく、イノベーションが普及していく、そういうところまでいっているのかどうか？あるいは、また、いったんできたイノベーションは、言ってみればすぐに陳腐化をします。さて、これは本当に常にイノバティブに回っていているのか。そういうことも含めてこれからのソーシャル・イノベーションの課題はまだまだあるぞ、と思っている次第です。

**今里：**社会をリアルに変えていく能動的な市民を育成するという点では、まったく新川先生と同じで心から共感するところです。ただ、さっき本多さんが言われたように、なぜ大原に農業なんだ？あるいは、なんで町家キャンパスなんだ？という点を少し説明しておきたいと思います。

まず、わざわざ大学のキャンパスを離れて、京都の町中に町家キャンパス江湖館という場を作ったのですが、その理由は、ご存じの方が多いと思いますが、ドイツの有名な社会哲学者、ユルゲン・ハーバーマスの公共圏を具体化したいということでした。公共圏の思想では、対話する市民、自分の我欲を捨てて公共の利益のために問題解決のために対話をして議論をして、お互いに話し合っただけでよい結果を出していこうという市民社会を一つの理想としています。これが公共空間論です。この考え方に私は以前から非常に共鳴してしまっていて、福岡でまちづくりNPOの理事長をしているときに——そのNPO 菅崎まちづくり放談会の暗黙のルールは「呑んだときの約束は守る」だったのですが——酔った勢いで「自分が2,000万円でも3,000万円でも出すから、建築中のマンションの1階部分を購入して、私的公共空間を作ら

うじゃないか!」と公言してしまい、その言質を果たすべく、民設公共スペース筥崎公会堂を作ってしまいました。

アクティブな市民社会では、市民が寄り集まっていろいろ議論する場が大事です。大学のキャンパス、あるいは教室には果たしてそういう機能あるのか。九州大学の時も、そして同志社に来てからも、必ずしもそうでない。自由闊達に、そしていろんな人たちが出入りして議論し、そこからソーシャル・イノベーションが生じるような場が絶対に必要なはずなのに、です。そのような訳で、京都だから町家に公共空間を設けたいということで、町家を探して、改装して、できたのが現在の江湖館というわけです。

ちなみに、江湖という名前は古くから中国にある言葉で、みんながより集まって議論をするという意味があります。日本で最初と言われる、福地源一郎（桜痴）が発刊した民間新聞の名前は『江湖新聞』です。同志社大学では建物に新島襄先生の言葉を付けるのが通例ですが、このような次第であえて江湖館という名前をつけたわけです。

もう一つ私の個人的な思いとしては、命と食と農の連関を変えていけるような人材を育てなければいけないという強い思いがありました。この食や農の世界ほど、遺伝子組み替え技術を駆使するモンサントなどの巨大なアグロバイオ企業にどんどん支配されて切り崩されているところはないです。人間の生存にとっての根幹である食の世界が本当に危ない状況があります。遺伝子組み換えが進んでいる種の問題も切実です。ここに切り込んで何とかわれわれの根幹である命を、細胞レベルから守っていけるような、そういう人材を育成したいということで、食農の領域でソーシャル・イノベーションを実践する場としての農場を設けたいと思いました。私自身、とりわけ食に対する思いは強いものがありました。理事長をしていた福岡市のまちづくりNPOが主体になって、上山田農楽校という、市民に無農薬有機栽培を楽しみながら学んでもらう学校をやっておりました。命と食と農をつなぐコミュニティレストラン、筥崎公会堂を経営したりしていました。それで大原に農場をとということで、さきほど本多さんのお話にもあったように、上村元事務長、それにNPO大原里づくり協会の方々のご支援もあり、それからま

ことに幸いなことに、長澤源一先生という日本では最高の有機農業者に指導者になっていただいて、渡辺雄人君とか藤岡良君、さらには同志社有機農業塾で学ばれたみなさんなど、有機農業でどんどんがんばって実績を上げている、そういう人たちの育成のお手伝いできたと思っております。

**本多:** ありがとうございます。2020年で両先生方のご退任になります。2021年以降、どのようにしていきたいか。どうなってほしいか?

端的にお二人に述べていただきたいと思っております。

**新川:** 2020年度でこの3人は基本的には、同志社の教育の現場からは離れることとなります。たぶん、どこかで何かをやっていると思います。こういう活動をはじめ、こういう教育研究をやり始めた以上は、棺おけに入るまでずっとやっているとします。墓場の底の方からそれでも「おーい」と呼んでいるかもしれない。「ソーシャル・イノベーターにえさをやっているか?」なんていう声が聞こえたら、そうだと思っていたきたいと思います。

それはともかくといたしまして、こうしたソーシャル・イノベーションのコース自体は、そうした名前を冠しているところは本当にほとんどなくて、本学のこの大学院があるのはあるのですが、本当に珍しい。でも、珍しいということは、希少価値であって、絶滅危惧ということではなくて、むしろこういう活動そのものに対する社会的な評価が、逆にどんどん高まってきたいて、その必要性については、もう大きな前提になってきているのではないかと、思っています。実際、同じ名前ではないのですが、類似した志を持つ教育機関、研究機関が増え始めているのです。

ただし、今、日本社会や大学ごとには、どちらかと言えば縮小思考、縮み思考がとて強くなっています。確かに人口減少社会ということもあって、大学の役割やその教育を狭い枠で考える傾向が強くなっているようにも思います。そういう中で、これまでの成果をどういうふうに生かしていくか、というのは少し考えないといけないかなと思っております。

ただし、このソーシャル・イノベーションの

コースが持ってきた重要な価値というのは、たぶん、これからの社会を支えていく重要な力になってきます。これがなければ、おそらく構造的に大きな変化をこれから経験せざるを得ない、特に日本社会や同様の問題をこれから数十年先に抱えるアジア諸国の中で、将来は見通せないと思っています。もうちょっと端的に言いますと、経済とか社会とかは、ある種、カタストロフィー状態に陥ったそのときにいったい誰がそういう状態を平常的な状態に組み立て直していくことができるのか。あるいは社会の激変で生じる問題をいったい誰が的確に調整できるのか。強権的な政府がやるという手もありますが、だいたいが失敗しますので、そのときに本当に最後に責任を負うのは一人ひとりの市民でしかないのです。世界中の歴史がそういうふうになってしまっているのです、そのときのその市民がどういう力をもって、自分たちの身の回りからその社会を立て直していくことができるか、つくり直していくことができるかというのは、ずっとこれまでも課題ですし、これからも課題です。そのときどきで力の出し方やアイデアは変わってきます。技術も変わってきますので、それを実践できる能力や力は、改めて社会の中でつけていかないといけないと思っています。それがソーシャル・イノベーションの力なのです。

そういうソーシャル・イノベーションというのは、ますますこれからその必要度が高くなると思っています。社会のいろんなセクターで必要になってくるのではないかなと思っていますし、その担い手として同志社ソーシャル・イノベーションコースが果たす役割というのは、むしろもっともっと発展をしてしかるべきと個人的には思っています。

**本多：**今里先生、最後に。

**今里：**私は退職したらまずは「月光仮面」になりたいなと思っています。月光仮面は、年配の人はご存じだと思いますが、1960年代に白黒テレビが普及し始めた頃の人気番組で、そのテーマソングは「月光仮面のおじさんは、疾風の様に現れて、疾風の様に去って行く。月光仮面は正義の味方だ、良い人だ。月光仮面は誰でしょう？」だったと記憶しています。つまり、

月光仮面は、「世直し、人助け」をミッションとする神出鬼没の存在なのです。月光仮面に自分をなぞらえるのはちょっとおこがましいかもしれませんが、現在得意としているアウトドア・ライフや狩猟のスキル、それに自前のキャンピング・トレーラーを駆使して、全国の困った人々のところに駆けつけて、お手伝いをするようなノマド人生みたいなのをしばらく歩んでとは思っています。

それから、これからの10年はSIに期待することですが、ソーシャルにとってイノベーションというならば、もっともっと市民社会の中に身近になっていくということを期待しています。企業にとってはイノベーションがなければ存続できませんので、当たり前になっていますが、われわれ市民社会の中で、あるいは学校教育の中で、教育のプログラムの中にイノベーションがあるのかというと、おそらく非常にまれでしょう。

ところが、最近フィンランドとかスウェーデンとか行く機会あって、そこでの学校教育にも関心を持っているのですが、びっくりすることに、小学校の低学年とかでイノベーション教育をしているのです。子どもたちに課題を与えて自分はどうようなソリューションを考案し提示できるのかというきわめて実践的な教育をしています。そして、中学生になったらすでに政党支持がはっきりしている。親は何とか党だけど私は何とか党だという。政治的な議論をがんがんとやっていると言います。フィンランドやスウェーデンの小学校の教科書とか見たら驚きます。全然日本の教科書と違います。そして、常に社会をイノベーションしていくことが、小さな国をサステナブルに発展させていく唯一の方法だということを自覚しているんだなあと感じました。

この前フィンランドとエストニアという国へ行きました。そこでは、小学校6年からプログラミング教育は当たり前、英語教育は当たり前です。中野先生は東京工業大学ですでに実践されていると思うのですが、イノベーションの必要性を学生達が身近に感じて、自分たちがイノベーターになっていくような道筋を創造的に討議的に話し合う、お互いに議論しあって了解しあうような、まさしくハーバードの市民的公共圏を具現化するような、そういう教育が行

われなければならないと思います。そういう大学院レベルの教育の先駆けにソーシャル・イノベーションコースがなっただけであればいいなと期待しています。

### 3. 功労者表彰

**本多**：どうもありがとうございました。この後、新川先生と今里先生の方からこのSIコースを設立するための本当に礎、影になり、力になってくださった長澤源一先生と上村元事務長に表彰をということでよろしく願いいたします。

**今里**：その前に忘れていましたが、この10年ぐらい総合科学研究所というかソーシャル・イノベーション研究コースで志半ばにして、ご逝去された方がいらっしゃいますので、この場をお借りして、心から追悼の意を表しておきたいと思っております。

**本多**：では、お願いいたします。

**新川**：今日は本当にありがとうございました。

それでは上村さんには、私たちが総合政策科学研究科にソーシャル・イノベーション研究コースをつくるに当たりまして、本当に当時事務長として献身的に努力をしてくださりました。たぶん、このコースを今里さんと僕がやろう、やろうと言って勝手に乗っかって、どんどんやり始めたときに、本当に面倒な事務手続きとかを担っていただき、大変だったと思います。当時の私は研究科長だったので、「あれやれ、これやれ」とか言っていれば良かった立場だったのですが、改めて大変だったろうなということで、ここに改めて感謝状をお送りしたいと思います。

それでは、「感謝状、上村恒夫殿。貴殿は平成17年度の同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーション研究コース設立に当たり、事務長として、事務室の皆さんとともに文部科学省や大学執行部をはじめ、関係機関との調整をはじめ、困難かつ膨大な手続きの処理等に献身的に尽力をされ、このコースの実現を可能にしてくださいました。よって、ここにその功績をたたえ、深甚なる感謝の念を表

します。平成29年11月23日、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース、教員、修了生、現役生一同」どうもありがとうございました。

(拍手)

**上村**：ありがとうございました。身に余る光栄です。いろいろとあったと思いますが、事務方としては事務長という名前だけで実際は担当の職員がやってくれていましたし、ほとんどの申請認可書類は今里先生、新川先生がお作りになっていました。ただ、1点、気になったのは、新川先生、今里先生と3人で文部科学省に行った時に、非常に緊張しました。と言いますのも、文部科学省の方はみな事務系職員なんですね。私も事務系です。同業他社ということで、非常に厳しい視線を感じたのが思い出の一つとして残っています。以上でございます。ありがとうございました

**司会**：ありがとうございました。続きまして、長澤先生にお願いします。

**今里**：先ほど申し上げましたように、大学院は命と食と農ということで、食や農には大変重点を置いてまいりました。その関連で、イタリアのスローフード運動の展開の中で創立された食科学(Universita degli Studi di Scienze Gastronomiche)大学院との交流が始まったのです。それを記念してシンポジウムをやろうということで、誰か京都に革新的な農業者はいないかと人づてに探していたところ、ご紹介いただいたのが、長澤先生です。そして、先生の太秦のお宅に本多さんと2人で、夜で分かりにくいところですが、やっとそこにたどりついて、「夜分にすみません。」とお目にかかったのが最初です。その長澤先生も大学院に入っていたとき、奥さんの澄子さんも一緒に入っていたいで、夫婦ともどもSIの修了生になりました。長澤先生には、大学院修了後も、そして、大学院科目の現代有機農業研究や市民向け農業者育成プログラムである同志有機農業塾の講師として長年ご指導いただきました。本当にありがとうございます。謹んで、感謝状を贈呈したいと思います。

「感謝状、長澤源一殿。貴殿は同志社大学大

学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコースにおいて、長らく現代有機農業研究の嘱託講師を務め、また、同志社有機農業塾の指導者として社会変革の志を持った有機農業者の育成に尽力され、農の分野におけるソーシャル・イノベーションに多大な貢献をなさいました。よってその功績をたたえ、ここに深甚たる感謝の意を称します。

平成29年11月23日、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース、教員、修了生、現役生一同。』

長澤：ありがとうございます。

私はSIコース2期生として入学をいたしました。当時いろんなことを思い悩んでおりました。私は農民でございます。農業現場の一番の課題は、農業をする人があまりいない。そして、また、農村で耕作放棄地、荒れ地がどんどん増えているのが現状でございます。それを、解消するためにはどうしたらいいか。農業をする人を育成したい。ただ、農家の子弟で農業をする人が非常に今も少ないです。外部から農業をしたいという人がいっぱいではありませんけれども、何名かおいでになります。そういう人らに農業に対することで、まず、私が一番感じてほしかったのは、誇りを持ってできる職業であるということです。

当時農業は3Kと言われていまして、なかなか厳しい環境下でした。農業は命をつなぐ、非常に大事な産業であるということで、まずは誇りを持ってほしい。そして、誇りが出てきますとあとはやりがいが出てきます。そして、後は農業をやりかけますと、なかなか生活が厳しいです。強制的にビーガンとまではいきませんが、それに近いような食生活になります。自分が作ったものぐらしか食べられないという感じで、非常に生活自体は厳しい状況でした。やはり農業も職人と同じで経験がいります。2年、3年、4年とやってきますと、だんだん上手になってきて、今では同期のサラリーマンよりはだいぶたくさん収入を得ているものもいます。やりようによっては、農業はしっかりとした所得を得られます。

ですから、そういうふうな誇りと仕事に対する責任とそれだけがあれば、それをするだけで地域貢献になります。若い人がおりませんので、



新川達郎氏

今里滋氏



今里滋氏 新川達郎氏 本多幸子氏

若い人が農村に入りますと、それだけで地域は元気になる。そういうことを有機農業塾を開設して、その地域の産業であります農業を元気にしていこうという、ミッションを持ってやってまいりました。

おかげをもちまして、大原地区でさせていただいて、ほぼ耕作放棄地を解消できました。それを大原モデルとして私は申し上げていたのですが、また、それをマネするような大学でもできておまして、そういう意味では非常に頑張ってくれた弟子に感謝しております。本日はどうもありがとうございました。

(拍手)

司会：先生方、お二人もう一度前の方に、よろしく願いいたします。

それでは、ソーシャル・イノベーションの父、今里先生、新川先生、SIの母、本多先生、そして、長澤様や上村様のようなさまざまな人の思いで、現在のSIがあるということが分かりました。私も現役をしておりますが、大人になれますように、すでに大人ですが頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いいたします。

(拍手)

ここで一部を終了させていただきます。少し休憩に入らせていただきます。

(第1部 了)